

予後に関する遠隔成績調査

東京医科歯科大学 歯科矯正学第一講座 三浦不二夫

唇顎口蓋裂患者における矯正治療が一般の矯正患者に比して困難である理由の一つは、治療後の後戻りに起因する。従って矯正治療の予後に関して調査、研究することは、この種の患者の咬合の habilitation を行う上で、特に重要である。

一般の矯正患者と異り、上顎側方拡大後の唇顎口蓋裂患者における後戻りには、歯の後戻りに加えて、segment 自体の後戻りが生ずることが特徴である。

そこで今回は、上顎側方拡大後の segment の動態を客観的に把握することを目的とし、以下の実験を行った。

資料は東京医科歯科大学矯正科外来において、上顎側方拡大を施した患者で、矯正治療後6カ月以上の保定を行った17才以上の片側性唇顎口蓋裂患者7名を実験群とし、対照群としては、矯正治療を受けていない同年令層の片側性唇顎口蓋裂患者2名である。なお、実験群では、頭部X線規格写真P-A上で、明らかに segment が離開したことが確認された症例のみを選んだ。

実験方法は、左右上顎第一小臼歯および第一大臼歯にバンドを装着し、それらを左右別々に0.9mm線にて連結した。口腔外に延長されたその2本の線の先端には、ソニー社製マグネセンサーをつけ、それによって segment の動きを検出することにした。

その結果、実験群の7症例のうち6症例に segment の動きが検出されたが、他の1症例においては検出されなかった。対照群では、いずれも動きは検出されなかった。

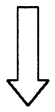
これらの結果から、唇顎口蓋裂患者において、上顎側方拡大を行った症例では、segment の後戻りを示す場合が多いが、安定している症例もあり得ること、また個々の症例によって、その差があることがわかった。

後戻りの程度が症例によって異なる原因の1つとして、側方拡大の量が関与していることを考え、それぞれの症例において、石膏模型上で、矯正治療前、後の上顎歯列弓幅径をノギスで計測した。その結果、拡大量が大きい症例ほど後戻り傾向が大きいとはいえなかった。

後戻りの原因には、その他に多くの因子が関与していると考えられるため、今後は症例数を増すと共に、その原因の1つ1つに詳細な検討を加え、予後に関する遠隔成績について、さらに研究する必要がある。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



唇顎口蓋裂患者における矯正治療が一般の矯正患者に比して困難である理由の一つは、治療後の後戻りに起因する。従って矯正治療の予後に関して調査、研究することは、この種の患者の咬合の habilitation を行う上で、特に重要である。